

むかし、あるところに、父親と、ふたりの息子がいました。

ある日のこと、父親は、息子たちをよんでいいました。

「おまえたち、三年のひまをやるから、なんでもよい、一人前になって帰って来い」

息子たちは出かけて行きました。

上の息子は、大工の^{だいく}ところに行つて、そこで三年間しんぼうしてはたきました。そして、りっぱな一人前の大工になって帰つて来ました。

下の息子は、何になろうかと考えながら歩いているうちに、奥山にまよいこんでしまいました。山の中を歩いていると、大きな屋敷がありました。息子は、ここにおいてもらおうと考えて、「なんでもしますから、ここではたらかせてください」とたのみました。すると、主人は、すぐに承知してくれました。

息子は、朝は早くから、夜は遅くまで、毎日、たぎぎを取ったり水をくんだり、米をついたりして、一生懸命はたらきました。

三年たつと、息子は主人に、

「そろそろ、家にもどらなくてはなりません」といいました。主人は、
「おまえは、よくしんぼうしたから、お礼にこれをやろう」といって、みすばらしい人形をひとつくれました。

息子は、人形をもらつて、屋敷を出しました。そして、

「三年もしんぼうしたのに、こんな物もらったつて、何にもならない」といって、人形を捨てようと思いました。すると、人形が、

「捨てるな、捨てるな」といいました。息子は、

「ふしぎな人形だ」と思つて、ふところに入れて、歩いて行きました。

町なかをぶらぶら歩いているうちに、だんご屋の前を通りかかりました。すると、人形が、

「あのだんごを食え、食え」といいました。あたりを見まわすと、だれもいません。息子はだんごを盗んで、お腹いっぱい食べました。

それから、また歩いて行くと、人形が、あれも取れ、これも取れというので、息子はどんどん取つて、とうとう大どろぼうになってしまいました。

家に帰ると、父親が、

「兄は腕のよい大工になったが、おまえは何になった」とききました。すると、ふところから人形が、小声で、

「どろぼうになったといえ」といいました。息子が、

「どろぼうになりました」というと、父親は、

「なんだと。それなら、今夜、うちの馬を盗んでみる。うまく盗めなかったら、ゆるさんぞ」といいました。

夜になると、父親は、となり近所の男たちにたのんで、馬屋の番をしてもらいました。男たちは、刀を持って待ちかまえていましたが、そのうち、いねむりを始めました。

息子が、馬屋に行ってみると、戸が少し開いていたので、そこからそっと人形を中に入れました。人形は、しずかに馬を外へひき出しました。そして、こっそりこっそりいねむりしている男たちの刀をそっと取って、かわりに麻殻おがらとすり替えておきました。

人形が、「よし」といったので、息子は、馬屋の周りをうろつきながら、

「そろそろ盗みに入ろうか」と大きな声でいいました。男たちはびっくりして目を覚まし、麻殻を引き抜いてさわぎたてました。ちょうどそこへ父親が見回りにやって来ました。馬屋を見ると、もう馬はいなくなっていました。

父親は感心しましたが、こんどはこういいました。

「明日の晩、わしは千両箱をまくらにして寝るから、それを盗んでみる」

夜になると、息子は、人形をふところに入れて、父親の部屋までやって来ました。戸口まで来ると、人形が、

「水を飲ませておくれ」といったので、水をやりました。それから、戸のすきまから人形を中に入れました。人形は、天井裏に上がって行って、父親が千両箱をまくらにして寝ている顔の上に、口にふくんだ水をはきだしました。

父親は、ねずみがおしっこをひっかけたと思って、びっくりしてとび起きました。そのすきに、息子は千両箱をふつうのまくらに取りかえて持って行ってしまいました。父親は、はっと気が付きましたが、そのときにはもう、千両箱はなくなっていました。父親は、

「こんな上手などろぼうなら、えらいもんだ」と感心しましたとき。

おしまい

村上郁再話